

Title	ヴィクトル・ユゴーの霊的指導者像 : Les MagesからLes Géniesへ
Sub Title	Vision des maîtres spirituels chez Victor Hugo : des Mages aux Génies
Author	小瀧, 昭夫(Ogata, Akio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.174(183)- 186(171)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0186

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヴィクトル・ユゴーの靈的指導者像 —Les Mages から Les Génies へ

小 瀧 昭 夫

宗教家に代わる詩人の機能・役割

初期ユゴーの宗教思想はカトリック教であるが、次第に教会の組織を離れ、ロマン派の神秘思想家に大きく影響され、晩年のユゴーは、Les Mages から Les Génies への賛歌へ向かう殆どユゴー独自の宇宙を確立した。すなわち、ユゴーのみならず、19世紀のロマン派の詩人たちは、詩人の役割が宗教界の聖職者のそれにとって代わったことを自覚したのである。

ユゴーは、すでに19歳のときに『オードとバラッド』の「革命時代の詩人」のなかで「地上の詩人は みずから迫害されて 牢獄の哀れな人間たちを なぐさめる 錯乱した民衆のなかに 堅琴を武器に 身を投ず 地獄のなかのオルベウスのように！」と歌った。このアンドレ・シェニエの『詩集』は、アンリ・ド・ラトゥーシュにより、1819年に出版されたが、この作品がロマン主義を告げる詩であるとは誰も思っていなかったし、《文学保守》の書評でも若いヴィクトルは「古人の率直でのびやかな手法」や「自然な思索や活気ある描写」や「深い感受性の刻印」を見ていただけだ。「真の詩人とは何か？ 自己の感じたものを、より表現力ある言語にて表現する、感じやすい人である。」といい、ヴォルテールの《詩とは感情である》を引用している。が、この詩では、無意識的にせよ、詩人=予言者を、すなわち三十五年後の詩人像を語彙の上ではすでに予告していた。

“C’ est en s’ élançant dans l’ abîme 深淵の身を投じて
Qu’ il en sonde la profondeur.” 深みを探るのだ。

“Prophète à son jour mortuaire, 彼が死ぬ日に予言者となって
La prison est son sanctuaire, 牢獄は彼の神殿
Et l’ échafaud est son trépied!” 死刑台は彼の三脚床几なり！⁽¹⁾

このオードの詩型が、『観想詩集』における《Les Mages》の壮大なオーケストレーションとなって蘇るのであるが、ユゴーが一貫して「詩人の役割」を問題にしていたことは、『光と影』詩集（1839）の同名の詩でも明らかだが、テーマを実に息長く抱え込んでしかも開花させる粘り強さには驚きを禁じえない。

しかし、問題の『祭司たち』にあっては、詩人のみならず、精神界を司る靈的な指導者すべてを指し示すようだ。元々、mage は、古代ペルシアのゾロアスター教におけるマギを意味している。マギは、メディア王国で宗教儀礼を司っていた氏族の呼称。古代イラン語のマグであるが、ヘロドトスの『歴史』には、マグの特異な風習として、死体を鳥や犬にくいちぎらせる、アリや蛇をはじめその他の爬虫類などを無差別に殺すのを義務とする信仰、特殊な葬送のやり方は、後代のゾロアスター教徒のそれと一致する。マギはギリシアの伝承では神秘的な宗教知識の所有者とみなされ、『マタイによる福音』の伝える、イエス降誕を予知した東方の三博士（《共同訳聖書》では〈占星術の学者たち〉）の話（三博士の参拝）は、このような伝統に基づくという。『マタイによる福音書』によれば、東方の三博士たちはエルサレムを訪れ、この世に生まれたユダヤの王を訪れる。彼らはヘロデ王の命をうけ、不思議な星に導かれてベツレヘムの幼子キリストと母マリアの下に着き、礼拝し、贈物を献じる。歴史的には博士たちは占星術師で、ペルシアの司祭たちとされる。（『世界宗教大辞典』平凡社⁽²⁾）だから magicien や astrologue の意味は、以上のことから派生したものである。いずれにせよ、magie の語源であることは明白である。

ところでユゴーが《Les Mages》のなかで、この靈的指導者を言い換えているが、それらを検討することで、mage hugolien の champs sémantique が明確になるのではないだろうか。と同時に詩篇のなかで mage のイメージがどのように増幅されていくのか。彼にとっての mage は何者か。

このオードのなかでユゴーは、mages をいろいろに言い換えている。

1) des prêtres (司祭) 2) les esprits conducteurs des êtres (存在者を導く精神) 3) les poètes (詩人) 4) ceux dont l'aile monte et descend (翼が上下する人々) 5) ceux en qui Dieu se concentre (神が集中する人) 6) ceux qu'attend Dieu propice sur les Horebs et les Thabors (ホレブ山やタボル山で慈悲深い神が待つ人) 7) ceux qui sentent la pierre vivre (石が生きているのを感じる人) 8) ceux que Pan formidable enivre (恐るべきパン神がうっとりする人) 9) ceux qui sont tout pensifs devant les nuages (雲のまえて物思いに耽る人) 10) les sévères artistes (厳しい芸術家) 11) les savants (学者) 12) les inventeurs tristes (発明家) 13) les puisieurs d'ombres (影の汲み取り人) 15) le poète s'adosse à l'arche. (方舟にもたれる詩人) 16) génie (天才) 17) tiare de l'ombre (影の教皇) 18) pontificat de l'infini (無限の教皇) 19) ces inspirés (靈感者) 20) Jérôme, vieillard du désert (砂漠の老人, ヒエロムニス) 21) Elie, un pâle esprit (青白い精神, エリア) 22) Saint Paul, lutteur redouté, immense apôtre de l'épée (剣の大使徒, 恐るべき闘士, 聖パウロ) 23) géant (巨人) 24) les prêtres de rire (笑いの司祭) 25) les prêtres de la joie (歓びの司祭) 26) les prêtres de l'amour (愛の司祭) 27) esprits (精霊) 28) arbitres (裁定者) 29) penseurs (思想家) 30) ces contemplateurs pâles penchés dans l'éternel effroi (永遠の恐怖に身を傾けた青白い観想者) 31) rêveurs austères (峻厳な夢想家) 32) ces sombres passants (この暗い通過者) 33) ces messies (この救世主) 34) spectateurs démesurés (測り知れない観察者) 35) têtes stupéfaites (啞然とした頭) 36) apôtres (使徒) 37) prophètes (予言者) 38) ces acteurs du drame profond (深い劇の俳優) 39) les sombres masques de quelque prodige inconnu (見知らぬ驚くべきひとの暗い仮面) 40) ces splendides histrions (この壮麗な役者) 41) l'Inconnu (未知者) 42) un homme surhumain traçant des lettres enflammées sur un livre de fumée (煙の書のうえて燃える文字を書く超人) 43) penseurs, ces sages (思想家, この賢者) 44) ces fous qui

disent : Je vois (私には見えると言うあの気違い) 45) le sphinx (スフィンクス) 46) ces hommes suprêmes (最高の人間) 47) ces poètes vainqueurs (勝利の詩人) 48) tous ces mages (これらすべての祭司たち) 49) tous les combattants des idées (思想の闘争者) 50) tous les gladiateurs de Dieu (神の剣闘士) 51) les songeurs sont les inventeurs (夢想家は発明家) 52) les hommes d'extase (恍惚の人) 53) les seuls pontifes (唯一の教皇) 54) lutteurs des grands espoirs (大希望を闘う人) 55) cavaliers des pégases noirs (黒い天馬の騎士) 56) âmes toutes nues devant Dieu (神を前にした素っ裸の魂) 57) voyants des choses inconnues (未知の事物の見者) 58) célébrateurs (祭司者) 59) révélateurs (啓示者) 60) géants (巨人) 61) prêtres, génies (司祭, 天才) 62) vivants sublimes (崇高な生者)

ここまで列挙してみると、ユゴーの抱いている mage のイメージは、単に宗教家から詩人へと変わっただけでなく、実はもっと広く深い領域をカバーしていることが分かる。天文学者や発明家や研究者といった自然科学の領域の人々も、喜劇作家やラブレーなど笑いの祭司たちも、ベートーヴェンやモーツアルトなどの音楽家も、バベルの塔の建設を目論むピラネージのような建築家も、ミケランジェロのような彫刻家も、mage に属している。宗教と科学と芸術と詩の領域で頂点に立つ、言うならば精神生活を創った巨匠を指している。いかなるジャンルに属していようとも、神に選ばれた人々である。しかしながら、冒頭の質問の答えは詩人であると明言しているように、詩人の使命が中心課題であることは確かである。

「人間の偉大さと呼ばれるにふさわしいことすべてを経験したあとで、私は亡命生活を生きる。そこで私は人間の生活を失い、「使徒」と「司祭」の性格を帯びる。私は司祭である。」(『アデルの日記』1854年4月)

この『アデルの日記』の断片は、おのれの亡命者としての生き方を、霊的な指導者の生き方に重ね合わせて、すなわち詩人＝司祭の機能と生活をおのれに課していることの証である。アンティオキアでアポリナリオスの講義を聞いて刺激を受けたが、非キリスト教文学への関心が修道生活の妨

げになることを悟って、シリアの砂漠に逃れて、4、5年間、隠修士の生活を送った聖ヒエロニムスのように、修道僧のイメージをおのれに課したのではないか。だがユゴーは、ユダヤ・キリスト教の予言者や使徒だけではなく、ギリシアの詩人や歴史家や数学者や哲学者などを、magesに数えている。レオン・セリエの分類では、祭司は以下のようにになっている⁽³⁾。

1) 古代：新旧約聖書—アダム、モーセ、エリア、ヨブ、ダヴィデ、サロモン、イザヤ、エレミア、バルク、エゼキエル、ダニエル、アモス、イエス、ヨハネ、パウロ、ヒエロニムス。

ギリシア—オルペウス、ホメロス、ヘシオドス、イソップ、アルキロコス、テュタイオス、ソロン、ピンダロス、アイスキュロス、アリストパネス、デモクリトス、ソクラテス、プラトン、エピキュロス、アナクレオン、ピオン、モスコス(リノス、テルバンドロス)フィジアス、アルキメデス、ユークリッド、ピタゴラス、ターレス。

ローマ—プラウトゥス、テレンティウス、ルクレティウス、大カトー、カトゥルス、ヴェルギリウス、ホラティウス、ペルシウス、ユウェナリス、タキトゥス。

ペルシア—ゾロアスター、マニ。

2) 近代：詩人、作家、思想家、法律家—ラブレー、スカロン、モリエール、ダンテ、アリオスト、シェイクスピア、ミルトン、セルヴァンテス、カモンイス、ヴォルテール、ルソー、ベカリア。

芸術家(画家、彫刻家、建築家、音楽家—ラファエロ、ミケランジェロ、ブラマント、ピラネージ、プリマティッチョ、レンブラント、ペルゴレーシ、モーツァルト、グレック、ベートーヴェン。

学者—コペルニクス、ニュートン、ハーシェル、フランクリン、フルトン、ヴォルタ(ジャクソン)。

探検家—コロンブス、ヴァスコ・ダ・ガマ。

ギリシア・ローマそしてユダヤ・キリスト教に属するエリートたちが圧倒的な数であるが、東方では、ゾロアスターとマニだけである。ユゴーの知的基盤が、いかに西洋中心であるかが理解される。東洋の場合、固有名

詞は挙げられず、「インドやエジプトは／地下室の暗闇のなか／小暗いポーチをくぐって入り込む！」(248-250行)といったように、漠然としたイメージに留まっている。『光と影』(1840)のXIIIの詩の延長上にあるイメージであろう。

ヴィクトル・ユゴーにおけるインドのイメージ

レオン・セリエも指摘するように、『ウィリアム・シェイクスピア』(1864)は、『祭司たち』(1856)の注釈書になっていることは明らかであるが、その九年間に *mages* の数が増えただけでなく、呼称も *génies* に力点が置かれてきたように思われる。人間の思考が頂点に登りつめた者として、ホメロス、ヨブ、アイスキュロス、イザヤ、エゼキエル、ルクレティウス、ユヴェナリス、タキトゥス、聖ヨハネ、聖パウロ、ダンテ、セルヴァンテス、シェイクスピアを挙げて、特に芸術の観点から、なかでも文学の観点から、ホメロス、アイスキュロス、ヨブ、イザヤ、ダンテ、シェイクスピアをもっとも高い頂点に置いた。しかも、『ウィリアム・シェイクスピア』では、以上の個人による作品に、集団的な作品すなわちヴェーダ、ラーマヤナ、マハーバーラタ、エッダ、ニーベルンゲン、ヘルデンブッハ、ロマンセロが付け加えられている。「とりわけインドの詩は、狂気が夢見るか夢が語る可能なものの不吉な豊かさがある」。これらの書物は人間だけで創られなかったようだといった『アッシューナガル』の記述を引用しながら、魔神やポリプテルス=祭司、半神と半悪魔、インドが賢者と呼ぶ象もエクリチュールにあらわれる。「アジアの聖典は明らかにわれわれの聖典より簡略化したり一元化するのが難しい」ユゴーのアジアのイメージは暗いと記しているが、その暗さは、謎めいていて、理解しがたい。「バラモン僧は、われわれの司祭のように、削除したり挿入したりしたけれど、ゾロアスターあり、イゼド・セロッシュあり、ゾロアスター教の伝統のエシエムがシヴァの名の下であらわれ、マニ教はバラモンと仏陀とのあいだで際立っている⁽⁴⁾」西洋におけるインド的な要素を持つ国は、ユゴーに言わせれば、ドイツに他ならない。「ドイツは西欧のインドであり、ベートーヴェンこそドイツの魂

である」。《Quelle ombre que cette Allemagne! C'est l'Inde de l'Occident.》
(p.91)いづれにせよ、ユゴーは、インドの詩に西欧の合理思想では割り切れない謎を見ていた。「これらの詩は、消えた蟻塚でできたピラミッドである」。また、ギリシアの悲劇詩人アイスキュロスにもインド的な不均衡、並外れたものを見ている。《Eschyle est disproportionné. Il a de l'Inde en lui...Il a le démesuré oriental.》(p.133)しかし、こうしたインドのイメージは、詩篇『祭司たち』にはまだ見えていない。

mage と astre の類似性

東方三博士は、不思議な星に導かれて、キリスト生誕を祝福に来たという伝説から、人を導く祭司（《Les esprits conducteurs des êtres》3行目）と星は観念連合のみならず、象徴的な意味を持ち、このオードでは、「中軸が太陽であるあの暗い車輪のすべてが回っている」（79-80）のを天文学者のコペルニクスが見たり、祭司は「暁の明星のように、栄光でいっぱい昇」（139-140）ったり、「黄金の星と暗い夜が闇のなかであの壮麗な役者について質問をしあ」（328-330）ったりしている。特に408行目の、

L'homme dit : Je suis Zoroastre ; 男は言った、私はゾロアスター

Et son sourcil abrite un astre, 彼の眉毛は星を隠し、

Et sous son crâne un ciel blueit! 頭蓋骨のなかで空が青くなる!

は、Zoroastre/astre が韻を踏んでいるだけでなく、ゾロアスターが祭司(mages)の階級に属し、ゾロアスター教での星の役割を暗示している。VIIにおける cromlech (クロムレック=環状列石=ストーンサークル)のエピソードにおいて、ブルターニュ地方の伝説であろうか、クロムレックは「夜」、岩は「死」という言葉を書くが、プレアデス星団に尋ねると、答えは「神」であった。

—Pléiades qui percez nos voiles, 我らの天幕を貫くプレアデスよ

Qu'est-ce que disent vos étoiles?あなたの星々は何を言うのか?

—Dieu! dit la constellation. 神なり! と星雲は言った。

「夜」と「死」は、「昼」と「生」の誕生を可能にすることは言うまでもな

いが、「星」とともに神的なものを暗示しているだろう。

Le crêpe de la nuit en deuil, 喪に服した夜の暗闇,
La pierre de la tombe obscure, 小暗い墓石,
Le rayon de l'étoile pure, 澄んだ星の光線は
Sont les paupières du même œil. 同じ目のまばたきだ。

そして《Tout est l'atome et tout est l'astre ;》（一切は原子であり、一切は恒星である）とまで歌うが、中心存在を探究する天文学者のハーシェルは、世界の上方に神を見、他方、探索できぬ恐ろしいものを横切って、下方の無限を眺めると、ユゴーが歌うとき、すでに I において、mages のひとり、《Pontificat de l'infini!》であったマニの教えである、上方の無限＝神と下方の無限＝悪魔という二元論の影響は否定できない。

Manès parle au gouffre puni, マニは罰せられた深淵に語る,
Écouté des astres sans nombre... 無数の星に耳を傾けて…

いずれにせよ、祭司たちは、星のところへ行く（《D'aller aux astres, étincelle.》）ことの恍惚を知っており、「翼」的な存在である。

Allez, prêtres! allez, génies! さあ、司祭たちよ！天才たちよ！
Cherchez la note humaine, allez, さあ、人間の調べを求めよ、
Dans les suprêmes symphonies 星でいっぱいの大深淵の
Des grands abîmes étoilés! 崇高な交響楽のなかに！

地球の音楽にかんするピタゴラスの理論に暗示されたイマジユリであるが、天体の宇宙的な調和を見いだす祭司のイメージをこのオードで歌いあげた。

『ウィリアム・シェイクスピア』では、人類を照らす Génies の魂が星に類似していることが書かれている。《Telle de ces âmes ressemble à un astre qui égoutterait de la lumière.》(p.159) 《Les aurores à côté des aurores, le renouvellement indéfini des météores, les mondes par-dessus les mondes, le passage prodigieux de ces étoiles incendiées qu'on appelle comètes, les génies, et puis les génies, Orphée, puis Moïse, puis Isaïe, puis Eschyle, puis Lucrèce, puis Tacite, puis Juvénal, puis Cervantes et

Rabelais, puis Shakespeare, puis Molière, puis Voltaire, ceux qui sont venus et ceux qui viendront, cela ne te gêne pas. Pêle-mêle de constellations. Il y a de la place dans ton immensité.》(p. 161) 《Tout recommence avec le nouveau poète, et en même temps rien n'est interrompu. Chaque nouveau génie est abîmé. Pourtant il y a tradition. Tradition de gouffre à gouffre, c'est là, dans l'art comme dans le firmament, le mystère ; et les génies communiquent par leurs effluves comme les astres. Qu'ont-ils de commun? Rien. Tout.》(p.115)

祭司の身体言語

Ceux dont l'aile monte et descend 翼が昇ったり降りたりする人々
翼的な存在としての祭司の上昇・下降の運動は、ヤコブの夢を喚起するが、むしろ次の光が入り、光線が出るといったことばが往来のリズムを暗示し、より正確に言えばむしろ遠心と求心のリズムを示唆していると言われるが、筆者によれば、『観想詩集』第一書 VIII の「続き」と重ね合わせたほうが分かりやすい。われわれの頭蓋骨のなかで起こっていることをイメージしたこの詩のなかに、《Les Mages》の原型が見出されるだろう。

Sombre peuple, les mots vont et viennent en nous ;

Les mots sont les passants mystérieux de l'âme.

「見えざるものの顔、見知らぬものの外観」や「誰によって創られたのか？ 誰によって捏造されたか？ 暗闇からほとぼしり出て」といった詩句は、エクリチュールが極めて神的な行為であるとユゴーが考え抱いていることが分かるだろう。言葉はわれわれの小暗い頭のなかで上昇し下降している、あるいは行ったり来たりしている極めてダイナミックな運動にゆだねている。『レ・ミゼラブル』のなかで、マドレーヌ市長がアラスの法廷に出頭して自分がかつてのジャン・ヴァルジャンであることを言うべきかそれとも言わざるべきか、部屋のなかで檻のなかの動物のように、往ったり来たり (va-et-vient) する《La tempête sous un crâne》の章は、まさに良心 (la conscience) の運動であり、すなわち神であり「言葉」である les mots の

往来運動に他ならない。頭蓋骨の内がより空間的な広がりを見せると、ピラネージ (Piranèse) と韻を踏んで、巨大なかまど (fournaise) のイメージと化し、その混沌から計り知れないバベルの塔が屹立してくる。いわゆるピラネージ幻想に他ならないが、すでに『東方詩集』(1829)の「天空の炎」で、寂れて暗いバベル塔、いつかは地球上に無限の螺旋形を座らせるはずのバベル塔、その階段は天頂まで昇るはずのバベル塔を歌っていたし⁽⁵⁾、『秋の木の葉』(1831)の「夢想の傾斜」で、突然波間から堆積や塔やピラミッドでいっぱい廃墟が湧き上がって、「諸世紀と諸場所の堆積で創られた巨大な建物のような」あの世界のバベル塔を歌っていたが⁽⁶⁾、『Les Mages』では極めて簡潔にエッセンスをくピラネージの暗黒の頭脳はあんぐりあいた大かまどなのだ」としてイメージ化しているだろう。さらに頭蓋骨の内部のイマジユリで極めてユゴー的な想像力を示すものは、牢獄のイメージであるが、その起源は『死刑囚最後の日』(1829)のなかの、「私の頭のうえに、空のかわりに、オジーヴ状の黒い天井があって、厚い蜘蛛の巣がぼろのように引っ掛かっている」という原型的なイメージで、オードでは「牢獄の天井、頭蓋骨に／蜘蛛の巣に引っ掛けて」と、詩化している。

magesの身体的な特徴に注目してみると、「不安げな口という口」が記述され、光が入る「眼」と光線が出る「額」が対句的に歌われたり、「ホメロスの裸足を永遠の波で洗う」とか「森の野性的な大司祭ヘシオドスは瞑想し歩く」といった「足」へ注目したり、「モーセは自然に向かって両手を広げる」といった「手」の動きを mages のボディランゲージとして歌う。「無数の星に耳を傾ける」マニ。「お前の耳が調べを聞く」アモス。『ウィリアム・シェイクスピア』によれば、「人間の精神には頂点があり、その頂点は理想にはかならないが、神はその頂点から降りてきて、人間はその頂点に昇る」と記しているように、何人かの Génies はこの上昇を企てるのである。天文学者のコペルニクスは海に似た大空を見つめる、リュクレティウスは「目が輝くような詩を創る」、「指で、キテレや、イシスや、アスタルテといった娼婦たちを追い払う」聖パウロ、祭司の身振りの役割を指摘す

るとき、モーセのように奇跡を起こす力が発揮される。「手をあげるたびに彼らは影あるいは曙を生じさせる」というように、magesのボディランゲージは強調しすぎることはないだろう。

『祭司』における主要なトーンである海のイメージは、『ウィリアム・シェイクスピア』のGéniesである《des hommes océans》の想像力の原型となる。大洋を眺めることは、Génieの魂を眺めることに他ならない。Génieは、謎や、闇や、暗さや、誇張や、怪物性など、すなわち多量の無限を宿している。《未知なもの》、《無限なもの》、《底知れぬもの》こそ、Géniesの神秘的な性質なのだ。「難解さと鋭敏さと暗闇の下にあなたは深さを見出すだろう。過剰の下に想像力を、怪物性の下に偉大さを見出すだろう」。天才とはなにか。宇宙的な魂か。未知の光線が射した魂か。「太陽の男」は、時に学者、時に見者、時に計算家、時に魔術師、時に航海師、時に建築師、時に祭司、時に立法家、時に哲学者、時に予言者、時に英雄、時に詩人となる。文明の展開が彼らの試みとなる。もっとも多様な、時にもっとも対立した人間たちが、突飛な側面から同意し、この同意のなかで、進歩という威張りきった論理が爆発するだろう。オルペウス、仏陀、孔子、ゾロアスター、ピタゴラス、モーセ、マニ、マホメット、さらに他の人々が、同じ鎖のひとつひとつの輪になるだろう。グーテンベルク、クリストファー・コロンブス、ルター、シェイクスピアも同様である。ひとりの天才がもうひとりの天才を終わらせる。これら偉大な新しい魂のめいめいは、哲学にせよ、芸術にせよ、科学にせよ、詩にせよ、新しくし、この世界を彼のイメージに創りなおす。これがユゴーの靈的指導者像であろう。(続く)

注

- (1) Victor Hugo : *Œuvres poétiques*, Tome 1 Avant l'exil 1802-1851, Bibliothèque de la pléiade, Paris, Gallimard, 1964, p.293.
- (2) 山折哲雄監修『世界宗教大事典』（「ゾロアスター」「マギ」項参照）平凡社, 1162, 1805頁。
- (3) Victor Hugo : *Les Contemplations*, bibliographie, notes et variantes par Léon Cellier, Paris, Garnier Frères, 1969, p.749.
- (4) Victor Hugo : *William Shakespeare*, Nouvelle Bibliothèque Romantique, Paris, Flammarion, 1973, p.89~90. 以下引用文はこのテキストに拠る。
- (5) Victor Hugo : *Œuvres poétiques*, Tome 1, p.589.
- (6) Ibid. p.772~773.
- (7) 我々は、《Les Mages》を読み進めていく過程で、*William Shakespeare* における《Génies》像へと傾斜したが、ユゴーの詩と散文の分析をする必要を感じた。この論文の続きは、慶応義塾大学日吉紀要「フランス語フランス文学」で発表する所存である。なお、一般的な霊的指導者像としては、Jacques Brosse : *Les maîtres spirituels*, Paris Bordas, 1989. 小淵昭夫訳『世界宗教・神秘思想百科』（JICC 出版局1993年）を参照されたい。

Bibliographie sommaire

- 1) Hugo, Victor : *Œuvres poétiques*, Tome 1 Avant l'exil 1802-1851, Préface par Gaëtan Picon, Edition établie et annotée par Pierre Albouy, Bibliothèque de la Pléiade, nrf, Paris, Gallimard, 1964.
- 2) Hugo, Victor : *Les Contemplations*, Texte établi avec introduction, chronologies des Contemplations et de Victor Hugo, bibliographie, notes et variantes par Léon Cellier, Paris, Garnier Frères 1969.
- 3) Hugo, Victor : *Œuvres complètes*, tome neuvième, édition chronologique publiée sous la direction de Jean Massin, Paris, Le club français du livre, 1968.
- 4) Hugo, Victor : *William Shakespeare*, Introduction par Bernard Leuiliot, Nouvelle Bibliothèque Romantique, Paris, Flammarion, 1973.
- 5) Hugo, Victor : *Les Fantômes de Jersey*, textes réunis, présentés et commentés par Francis Lacassin, Editions du Rocher, 1991.
- 6) Bénichou, Paul : *Les Mages romantiques*, Paris, Gallimard, 1988.
- 7) Gaudon, Jean : *Le Temps de Contemplation*, L'œuvre poétique de Victor Hugo. Des misères au seuil du gouffre (1845-1856), Paris,

Flammarion, 1969.

- 8) Pruner, Francis : *Le Sens caché des Contemplations de Victor Hugo*, Paris, Guy Trédaniel, Editions de La Maisnie, 1986.
- 9) Seebacher, Jacques : *Sens et structure des Mages*, Revue des Sciences humaines, juillet-septembre, 1963.
- 10) Seurat, Denis : *La Religion de Victor Hugo*, Paris, Hachette, 1929.
- 11) Villiers, Charles : *L'Univers métaphysique de Victor Hugo*, Paris, J. Vrin, 1970.